



東高だより ーはなみずきー

第70号
(H24.2.12)

「さてどうしたものか」

さてどうしたものか。いろいろなことで迷う。私が文章を書くのは、その迷いを一つでも整理できたらと思うからである。じゃあ書けば迷いが吹っ切れるかという、そんなことは決してない。逆に書くことで迷いがさらに深くなることもある。逆効果というやつだ。

それでも書いているうちに、ぼんやりしていたことが次第にはっきりとした輪郭を持ってくることがあるのも事実である。口で説明するより書くことは理路整然としたものが要求される。首尾一貫も必要だ。だから自分の考えを簡潔にまとめて言葉に表現するというのは知的な作業である。1日のどこかで知的生活を求めること。これはおいしい食べ物を食べたりきれいな服を身にまとうのと同じくらい贅沢なことである。毎日繰り返される日課の中で、段々としぼんでいく自分を見ないわけにはいかない。すると急に不安に襲われたり自信がなくなっていく。それが普通なのだと思う。体力は衰え、気力も萎えてくる。病気にも罹る。死の不安が増殖し始める。こんな自分をいい意味で武装するのがちょっとした知的生活だと思う。知的好奇心を失わず、まだまだ大丈夫と新しい知識を身につけたり技術を習得する。暇でしかたないなんて後ろ向きではなく、まだまだやりたいことがいっぱいあると挑戦心を燃やすことで、知的生活が促進される。だから文章を綴ることで自分を見つめ直すことが、私流の贅沢なひとときの過ごし方である。

今年の12月の中旬からテレビのスイッチをひねったことがない。最近のテレビ番組はバカバカしいものがひどく多くなった気がする。どこからかマッシュルームのようにむくむくと湧き出てきたタレントに、テレビがハイジャックされてしまった。『美の巨人たち』という美術番組などは大好きで、かかさず見ていたものである。なのにそれさえ見なくなった。見たいのだけれども、どれくらいテレビなしの生活を継続できるか試しているところである。

テレビを見なくなってどう生活が変化したか。まず、本を読む時間が圧倒的に増えた。これまでは炬燵に入ってごろごろする時間が長かった。そして仕事疲れでそのまま眠り込んでしまう。いわゆる自堕落な生活だった。それがテレビを見なくなると、することが限られてくる。本を読む。クラシック音楽を聴く。文章を書く。あと思索(妄想か?)に耽る。旅も好きだが夜旅に出て翌朝仕事というのは不可能だから、これは諦めるしかない。酒は? 最近は朝のランニングがあるので飲まないことにしている。

ということで読書に多くの時間を費やす。そしていろんなことを考えて疑問が湧く。それを自分なりに文章にまとめてみる。これが最近の夜の日課になってしまった。自分で言うのもなんだが、結構いい調子だ。晩ご飯を食べてすぐごろんとなって、そのまま朝までグーグーは健康に悪かった。だから体調もよくなったし、精神的栄養も摂取できて一石二鳥というわけである。

人間はいろいろなことを知ると生活が楽しくなる。それを契機に次のステップへと進みたいくなる。こうやって成長していくんだと思う。体が衰えても知識と経験で武装できる。これは人間としての強みだ。技術だって歳をとったからダメというわけではない。年齢の積み重ねは人間としての年輪を増やすことだ。スルメをかじるのと同じで、噛めば噛むほどいい味が出てくる。人間としての味がね。それが技術にも現れる。「あのジジイ目が死んでねえや。ちとかなわねえな」と言わしめることになる。う〜ん、こんなのっていいよな。憧れる、本気で。映画俳優だとジェームス・コバーンとかジョン・コネリー。勿論、私の大好きな高倉健もそうだ。

食って、寝て、排泄するだけの生活ではなんか物足りない。ワサビとか七味唐辛子といったスパイスがほしくなる。流れて消えていくんじゃなくて、なんというか小さくても積み上げていけるもの。そんなものがあると人生は楽しくなる。今年の東日本を襲った大地震で、人間は自然の前では芥子粒に等しいと誰もが痛感したと思う。恐れおののいたはずだ。いくら科学が発達して人間が小利口になっても、自然を相手にすれば赤子同然である。だから自分の存在の危うさを知り、常に反省是正しながら与えられた命を懸命に生きるしかない。時間という限られた命を。生きてよかったと思える人生を送らなければいけない。生きていてよかったと思えることを見つけること。それが私たちがこの世に生まれてきた理由ではないのか。

真剣に生きるから悩み苦しむ。さてどうしたものか、となる。私のような意志薄弱で風見鶏みたいな人間は、金魚のウンコみたいなことにも付和雷同し自分を見失いがちになる。群羊を駆って猛虎を攻めるタイプの強いカリスマ性を持った人間もいるが、たいていの人は日々の生活に流され、気が付くと老いているのではないか。その間、さてどうしたものか、と何度も首をひねる。ところが答えが出てこない。

これから何度も「さてどうしたものか」と遭遇することだろう。明確な答えなど出てきそうにない。そんなとき自分の考えをまとめるつもりで文章にすることが、テレビのなくなった生活の潤いである。

